

【一般演題5】 第18席 「フランスにおける鍼灸医学の受容－文献的考察」

大阪 山口 雄三

中医学の欧米への伝来は、17世紀初頭、当時中国や日本に派遣されていたイエズス会宣教師の本国への手紙の中で断片的に紹介されたのかはじまりである（M. Dabry 1863）。その中でも R. P. Harvieu は grenoble で「Les secrets de la Médecine des Chinois（中国医学の神秘）」（1671）を出版し、特に脈新について詳しく紹介した。次いでオランダの外科医 Ten Rhyne が「Dissertatio de Acupunctura（鍼術研究）」（1683）を London で発表した。これが医師による最初の紹介である。その後17世紀中に6つの論文、18世紀には18の論文が出ている。それらの著者の中には Valsalva（1707, 伊）や Vicq d' Agyr（1787, 仏）等の名がある。19世紀になるとその数は急激に増え、142の論文が出ており、その中には、Berlioz の「Mémoire sur l' Acupuncture（鍼術覚え書）」（1816）, Sarlandière の「Mémoire sur l' Electroacupuncture et sur l' empl-oi du moxa japonais en France（フランスにおける電気鍼及び日本式灸）」（1825）等がある。20世紀に入ると1929年までに200近い論文が出ている。これらは同じ時代の日本や中国での論文数に比べて決して少ない数ではないが、実地臨床の上では見るべき広がりはなかった。フランスで実地臨床に広がり示すようになったのは、1929年 Soulié de Morant が「Précis de la vraie Acupuncture（真正鍼術概要）」をフランス・ホメオパシー雑誌に発表して以来で、これがドイツに広がり、漸次ヨーロッパ・アメリカに広がった（但し、旧ソ連への広がりとは別の経過をとっている）。欧米では独仏を中心にホメオパシー医学の伝統と経験がある。ホメオパシーには195の皮膚反応点と189のホメオパシー薬があり、これらと鍼灸の融合をはかることで鍼灸の受容を容易にした。